

大会長よりご挨拶



大会長

ケネス 田中

武蔵野大学名誉教授

現 本願寺総合研究所委託研究員

【著書】

The Dawn of Chinese Pure Land Buddhist Doctrine: Ching-ying Hui-yuan's Commentary to the Visualization Sutra. (中国浄土教の暁 — 浄影寺慧遠の『観無量寿経義疏』) (ニューヨーク大学出版、1990年)。

日本では、どうして宗教と医療が水と油のように噛み合わないのでしょうか？よく聞くのは、僧侶が入院している檀家さんや知り合いの方をお見舞いに行くと、病院側はあまり協力してくれなく、また良い顔をしないということです。その上、その檀家さんすら喜ばないどころか、「私は未だです！」と返答することがあるようです。この「未だです」とは、仏教や僧侶のイメージが葬式や枕経などを連想するからでしょう。これは、私としては残念なことであるだけでなく、「私は未だです！」という反応は少し滑稽にも映るのです。

私は四〇歳代の時、カリフォルニア州の仏教寺院の住職を務めたことがあります。私の重要な役目の一つは、寺院の信者・メンバーズを病院や自宅にお見舞い訪問することでした。その際、病院も歓迎してくれ、色々と我々聖職者へ気を配ってくれました。また、信者の方々も心から喜んでくれたのです。

この日本とアメリカの違いは、キリスト教の影響が強いアメリカと仏教が強い日本に原因があると思われるかもしれません。しかし、仏教が日本のように根強い隣の韓国や台湾では、宗教と医療の関係はとても密接で協力的なのです。首都ソウル付近にある仏教系大学は、大学病院を持ち、なんと病院内に葬式会場を設置しているのです。台湾は、「仏教王国」と言えるほど仏教の存在感は高いですが、僧侶の医療機関への関わり方はとても密接で積極的なのです。

以上のような医療界側または日本社会全体の態度は、宗教の本質をよく知らないことに依る偏見に基づいていると思われます。もちろん、科学と宗教の目的や手法は、異なりますが、矛盾や対立はしないのです。それどころか、科学と宗教は有意義な関係を持つことができます。いや、今後はお互いをより必要とするようになると確信しています。それは、欧米や東アジアの国々がすでに証明しています。

二十世紀の科学を代表するアルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) は、未来には「広大無辺の宗教」の必要性を訴え、仏教を高く評価している。

未来の宗教は、広大無辺の宗教となる。それは、人格的神を超越し、硬直した教義や神学を避けなければならない。自然と精神の両領域を含み、自然と精神の全てが、有意義な一体として体験される宗教的感覚に基づかなければならない。。。。 仏教こそこれらの要素を持っている。もし近代科学に対応できる宗教があるとすれば、それは仏教である。¹

このような精神や見解がこの数年、特に東日本大地震の以降、日本社会でも高まってきています。その一角として、「スピリチュアルケア学会」の活躍や「臨床宗教師」の制度の設置は大いに歓迎できることであります。宗教と医療の関係の改善の兆しが見え、今年の本学会の大会もその波に乗って貢献できることを目指しています。どうか、ご賛同とご協力をお願い致します。

¹ Thinley Norbu, *Across the Cleansed Threshold of Hope: an Answer to Pope's Criticism of Buddhism* (Jewel Publishing House, 1997)の"Welcoming Flowers"の章に引用されている。